

## 料理人4代 (005)

タヴォラアミーカ 榮楽亭 小島敏裕

### 戦乱をのりこえて

昭和19年、強制道路疎開により、榮楽亭は取り壊され、信次郎(12代目)は直来町のアジア製靴(軍靴製造業)の社宅に住み、賄いとして働かされますが、空襲による焼夷弾により、その場をも奪われます。

新栄の交差点の南東角にバラックを作り、とりあえず肉屋を始めますが、さばくことはできても金銭感覚が異なる商売でうまくいきません。やはり食事の店をと洋食屋を再建しようにも、当時営業許可が出るのは寿司屋のみでした。米飯配給制度により、一人前一合の米又は米配キップ一枚自参の方に限り一

人前の寿司を提供し、加工賃は別にいただくというのが一般的建前とされていたのです。

そこで、表は小さな立食の寿司屋とし、裏にミスをはってウサギや鶏肉のカツを出す場所を作り、その屋根裏に住むという生活を2年ほど続けます。マーケットと呼ばれ、5〜6軒の店が並んでいました。

昭和23年、現在の雲竜フレックスビルから広小路を挟んだ向かい、村瀬銀行の跡地に土地を求め、覚王山にあった初代銀治郎の家の半分を移築して榮楽亭再興の足がかりとします。移築すると、ガラス、セメント等の配給を受ける権利をもらえたのです。

祖母(二代目の妻)しきの名をとり、志貴寿司として出発しました。父司朗(3代目)が店を継ぐために実家へもどるのはその翌年になります。

父は名電校卒業後、中島飛行機に勤めましたが、航空隊への入隊直前に終戦をむかえます。

終戦前、空襲と地震が続きます。近くの紡績工場で働いていた女子高校生達が地震で半壊した建物で生き埋めとなったので救出に向えという命令を受け、レンガ造りの建物に入ります。目もあけられぬほどの粉塵と瓦礫の中、女子高校生を探し出してその死体を食堂のテーブルの上に置いていくという悲惨な体験をします。



榮楽亭再出発店 志貴寿司

母も、市立第三高女 後の(旭ヶ丘)で学ぶ中、両隣の防空壕がやられ、多くの同窓生を失っています。そのためとっては変ですが、学友との絆は強く、母はもう亡くなりましたが、私が引き継いで文をやりとりしています。

父は終戦後、中島飛行機の近く、逓信局へ勤め、塩の管理を任されます。海水をむしろにかけて天日干しの後に煮つめた自然塩でした。

そして2代目信治郎から、つぶすことになってもかまわないから店を継がないかと提案され、本格的に寿司を習うため、24年、東京目黒の常寿司に入ります。司朗の兄、舒雄が戦後に復学した日大へ通う生活の中でできた縁を頼ったのです。そこは兄弟で魚屋と寿司屋を隣り合わせ、白身魚を多種揃えた通の店でした。築地での魚の買出し、仕入れ、仕込み、握り等を習って名古屋へもどり、立食寿司を始めます。名古屋で3軒目となる立食は、客にもとまどいが多く、なかなかうまくいきませんでした。看板を出さずに裏でやっていたとんかつ洋食は繁生し、客は寿司屋を通りぬけてとんかつばかり食べていたということです。

また、奥の2階ではスキヤキを出し、芸子さんによる接客と三味線で、ヤミの商売ながら すごい売れ行きでした。

やがてごはんを売ってもいいという許可とともに職人を使っていた寿し屋はさびれていき、広小路の電车道が通る頃、榮楽亭の看板を掲げ、洋食屋として再始動になります。